いいだ未来デザイン2028戦略計画「2025（令和７）年度」の評価についての意見交換の内容

いいだ未来デザイン会議委員からのご意見・ご提案	ご意見・ご提案に対する回答
＜基本目標５　誰もが多様な働き方で活躍でき、次世代につながる魅力ある産業をつくる＞ 【中田委員】 ・ネスクーイイダとは、どのような仕組みでどのような組織なのか。	【市瀬産業経済部長】 ・中小企業が個別に営業活動を行うのは難しいことから、共同営業を行うための「ビジネス支援ネットワークセンター」を産業センターの中に立ち上げ、下請け企業の営業活動を代行する仕組みとなっている。本地域は下請け企業が多く、特定の企業と下請け企業という親子関係での取引が中心だったが、平成９年頃、その構造に変化が生じたため、自ら受注を開拓していく必要が出てきた。具体的には、各種展示会への共同出展や営業窓口は支援センターのコーディネーターが受注した仕事を会員企業へ分配するなど。現在は、下請け企業が自立化し、部品単体の受注から製品開発へとシフトする動きも活発化している。約140社まで拡大しており、外部から仕事を受注することに加え、会員企業間での地域内取引を促進し、域内での仕事の循環を図るという２つの取組を進めている。
【今井委員】 ・観光分野について。二次交通の整備や星空保護区の取組について具体的に教えてほしい。	【市瀬産業経済部長】 ・二次交通については、遠山郷での取組となる。現在、実証実験として、遠山郷の道の駅やいくつかの旅館等と連携し、タクシー等で南アルプスの登山口（光岳など）までの送迎を試行している。また、芝沢ゲートまでの道のりが非常に狭く崖崩れが多い箇所になる。個人の登山客が芝沢ゲートまで車で乗り入れて駐車し、そこから登っている。一方で、環境配慮や安全面から一般車両の進入を制限したいという考えがあったことから、エコ登山の一環として、南信濃の梨元停車場の使われていない建物を解体し、駐車場として整備。そこからタクシー等で登山口の近くまで送迎する準備を進めている。
【今井委員】 ・登山者の歩く距離が長くなったということか。	【市瀬産業経済部長】 ・歩く距離が長くなるということではない。芝沢ゲートから実際の登山口まで歩く必要があるため、その間を車両により登山口付近まで送り届ける実証実験となる。 ・下栗の里やしらびそ高原の人気が出てきているため、上高地のようにマイカー規制を行い、自家用車を進入させない仕組みをつくりたいという遠山地区の構想がある。 ・星空保護区については、遠山郷での取組となる。御池山クレーターやエコパ

	ーク・ジオパーク、宿泊施設（ハイランドしらびそ）までを含めたエリアで、光害を抑えて綺麗な星空を観測できる「星空保護区」の認定を目指している。日本国内ではすでに４カ所で登録がある。しらびそ高原は南アルプスと伊那谷山地に狭まれて光が遮断されるため、非常に条件が良い場所。現在、条例制定の準備を進めており、認定を申請していく予定。これにより阿智村とも連携が図れ、星空ファンや若年層を呼び込む流れをつくりたい。
【今井委員】 ・各取組に意味があるのはよくわかる。一方で地産地消や域内循環（域内消費）という立て付けについて、具体的にどこまで価値があるのかお聞きしたい。ＢｔｏＢビジネスの世界において、地域内だけで仕事を完結させようとすると、リニアが開通するにしても視野が狭くなってしまうのではと危惧している。域内だけで付加価値を上げていくというよりは、域外へ向けてしっかり価値を提供し、域外で渡り合えるだけの力をつけるべきではないかと思う。競争力を高めるためにも、背中を押すようなアプローチも必要だと感じている。	【市瀬産業経済部長】 ・予算的には外貨獲得（ＢｔｏＢ）の戦略の方が圧倒的に多い。ただ、コロナ禍などの外的要因による影響あったため、域内循環の比率も考えていくよう環境と経済のバランスの中で小さく進める流れがある。農業で例えると、果樹（リンゴやブドウ）などへの支援が充実しているほか、市独自の特別栽培農産物（減農薬。減化学肥料）の取組も始めた。このような取組を域内で進めることで、高付加価値化し、将来的には域外への高額販売や環境配慮が進んでいる地域として移住促進につなげたいと考えている。
【高橋委員】 ・結局、外貨を獲得していかないと地域は維持できない。観光にしても、域外から来飯する人にとって魅力的に映るものを提供して、外貨獲得につなげる仕組みをきちんと、分かりやすく提示することが大事だと思う。魅力が伝われば結果的に域外から人が来て感動してくれる。焼肉ロックフェスも地域の中で盛り上がりをみせており、実を伴って展開されている。ネスクーイイダも最終的には域外へ売り出すための施策だと思う。全部がつながるというストーリーをこの基本目標の中でうまく出せると、より分かりやすいと思う。	
【近藤委員】 ・阿智村の星空ナイトツアーは、全国的にも「星空」のインパクトがとてもあり人気になっている。阿智村と飯田市のしらびそ高原をセットにできれば、上手くアピールすることができればすごく良いと思う。まずは地域住民がこの取組を知り、口コミで「飯田に来てみなよ」と地域の自慢が広がっていく関係性も重要だと思う。また、天竜峡のイベントでも、地区の方たちが集まって楽しそうにしている。地域外からも来てもらえると嬉しい。インスタグラムなどのＳＮＳで休日イベントの情報を発信しているママ世代の方々もいるので、そのようなインフルエンサーと連携して、若い世代に広報するのも良いと思う。	

【高橋委員】 ・南信州広域連合で公式インフルエンサー事業というのをやっており、５人のインフルエンサー（フォロワー29万人などの影響力のある方々）を選抜して南信州の魅力を発信してもらう取組を進めている。このような連携は進めていきたいと考えている。	【市瀬産業経済部長】 ・若年層に対して、地域への関心を持ってもらうことは非常に大事だと思っている。
【高橋委員】 ・阿智村（昼神）の星空ツアーは、その場で１時間の勝負。その時、星が見えるかどうかを楽しむやり方。一方で、しらびそ高原の場合は宿泊を伴うため、滞在している間に９割方の星空を見ることができる。明け方の４時に見えたり、新月の前後に綺麗に見えたり、雨が上がった瞬間にパッと見える星空に感動したりと、時間的な使い方が異なるため、阿智村と競合はせず、相乗効果を生み出せるはず。	
【西澤委員】 ・多様な働き方について。子育て世代の支援として、未婚女性や独身の女性がいかに飯田に留まってくれるかが入り口として大事なのではないかと思う。そこが不足すると、結婚する前に都市部へ転出してしまう現象が起きるため、在宅勤務やサテライト勤務ができる企業への投資を増やすことが良いのではないかと思う。さらに、産業団地（座光寺など）については、外部企業の進出によって人口が増える際、近くに小・中学校がある住みやすさが大事になる。工業団地の開発の際にも、学校の近くなどの住みやすい場所と地理的に関連づけて開発を進めていくと、政策が「点」ではなく「線」となってつながっていくのではないか。	【市瀬産業経済部長】 ・まさに座光寺のＳＩＣのエリアは、今までの工業団地ではなく、研究所など、新しい産業団地の形を模索している。民間とも連携して、そのような切り口で進めていきたいと考えている。
【中田委員】 ・企業の進出により雇用が生まれても、お金がすべて域外に吸い取られてしまうのでは意味がない。地元の人たちが自分たちのものだと思えるような、魅力探しを一緒に進めていく社会設計（ソーシャルデザイン）が本当に大事だと思う。また、独身女性や、シングルマザーの方々が働きやすく、周りがサポートしてくれるような地域になれば、女性たちも地元に残るし、さまざまな立場の人たちが転入してきてくれるのではないかと感じている。	
【中田委員】 ・林業について、小規模な個人所有の人工林の集約化について、最近では「自伐型（じばつがた）林業」が注目されているかと思う。自伐型林業の関係の集まりに行くことがあるが、若い人たちがとても多く関心が高い。ただ林業に関心があっても、そういう場がないと参加できないため、市民や若い人が関われるような企	【市瀬産業経済部長】 ・若手が引っ張っていく形は必要だと思っている。農業にしても林業にしても、平地に比べて効率の悪い地域（中山間地域）だが、地域の弱みを強みに変えられる可能性もあるため、うまく取り組んでいきたいと思っている。

画があると良いのではないかと思う。また、農業分野でも中核農家だけでは限界が見えてきているため、農業を始めたい市民や移住者の「農ある暮らし」への支援がこれからは大事だと思う。

【熊谷（良）委員】
・労働の立場からお話させていただく。深刻化する労働力不足を解消するために、地元の小中高校生に対して地域産業や企業の魅力を伝える取組の強化とあるが、長野県の中でも南信は、北信や中信に比べて賃金体系が低い地域にある。なかなか魅力ある企業があったとしても、若者はまず賃金を見て就職を決めると思う。近年、春闘などを通じたベースアップが行われ、一定の賃金上昇傾向はあると思うが、昨今の物価上昇やエネルギー価格の上昇により、上がった分だけで生活をカバーできているかというと、実際はそれ以上に物価が上がっているため生活が苦しくなっている現状がある。そのため、地元に就職してくれる若者が少なくなっている傾向にある。そうした中で、先ほどからお話に出ている「観光」と「農業」を軸にした取組が一番良いのかなと思っている。観光の中に農業分野の要素を取り入れられるような企業体を作ってはどうかと思う。休日、私の在住する阿智村では、中京方面から国道を走るツーリングのライダーや車をよく見かけるが、正直、市内のどこを目的地にしているのかと思うことがある。飯田市内に観光と農業が一緒になった体験型テーマパークのようなスポットがあれば、域外からの集客にもつながり、地元での雇用や、県外からの移住者も呼び込める魅力的な分野になるのではないかと思う。

【中田委員】
・最近、本当に田んぼ（米作り）をやりたいという人が多くなったと感じている。ただ、実際にアプローチする場所や体験する機会がなかなかない。自分自身も近くにないのでわざわざ茨城県の田んぼに通って栽培しているが、おかげでコロナ禍や東日本大震災の際も米には困らなかった。自分の食べる分くらいの米は作れるという安心感は大きい。「令和の米騒動」などもあり、食への意識が高まっている人たちが確実に増えている。田んぼの管理（真夏の水管理や草刈り、水路掃除）は非常に大変だが、それを逆手にとって、「水路掃除をやりたい人」を募集しているような事例もある。すると参加者がわざわざお金を払ってまでして集まる。水路を掃除したり、草を刈ったりすること自体が面白いと感じるそう。地域でお昼ご飯を食べさせてもらうだけで喜んできてくれる。そういう関心のある人たちが小さい田んぼでの栽培を目指せるような体験の仕組みを作れたらすごいと思う。

【市瀬産業経済部長】
・中小企業が多い背景があるため、この地域で賃金を上げるというのはかなり大変なことだと思う。ただ、最近、国や県では、賃金を上げると補助金の採択率を上げたり上乗せしたりする動きが出てきている。飯田市としても、賃金引き上げに対する奨励金などのメニューを考えた方が良いのではないかという意見が担当部局内でも出ているため、ぜひ検討してみたいと思っている。これまでは「賃金は企業が上げるもの」として行政はほぼノータッチだったため、どちらかというと「働く環境づくり」に力を入れてきた。若者の定着支援や、男性の育児休暇を取りやすい環境を作る企業への融資優遇など、働きやすい環境づくりに力を入れてきたが、これからは賃金を上げてもらうための政策も少し考えていく必要があると思っている。また、この地域の産業規模は、製造業の出荷額が約 3,800 億円と圧倒的に大きいのに対し、農業が出荷額約 100 億円、観光が約 10 億円となっている。どうしても製造業が大部分を占めるため、人材も製造業で多く働いているという現状がある。観光や農業の分野はまだまだ遅れているため、少しでも出荷額を上げていきたいと考えている。

【熊谷（良）委員】 ・米作りで一番大事なのは、やはり水管理と雑草管理だと思う。特に６、７、８月前半の管理が一番大変。飯田は平地で水田をやっている方は１～２割。多くは中山間地域の高い土手のところで、機械を持って大変な作業をしている。そうした中でも、稲作りを体験したいという人に提供してみるのも良いかもしれないが、実際にやってみると大変だと感じる方も多いと思う。 【中田委員】 ・草刈り後の綺麗になったことへの達成感や、刈り払い機などの農業機械を使える楽しさ、使いこなせるかっこよさや嬉しさもあると思う。ただの作業ではなくそうした体験としての面白さにつながると域外からも意外と来てくれる。ぜひそういった取組を増やしてほしい。	【市瀬産業経済部長】 ・現在、ＪＡと連携している１日農業バイトは右肩上がりで非常に増加している。